

# 小学生の仲間集団と学級適応<sup>1)</sup>

—仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連—

三島浩路\*

## Friendship and Class Adaptation among Elementary School Students: A Relationship between the Exclusiveness of Friendship and the Class Climate

Kouji MISHIMA\*

This study examined the directivity toward the peer group, class climates related to friendship, the state of friendship, and class adaptation on approximately 1,400 the fifth and sixth graders. As a result of the analysis, the following results were obtained only among female students: A discrete class climate was strengthened by the “directivity toward fixed groups”, and a discrete class climate consequently strengthened the “directivity toward monopolized friendship”. Moreover, the “directivity toward monopolized friendship” strengthened the “directivity toward fixed groups” in turn, an existence of such circulative process was implied. Furthermore, it was also found that the “directivity toward monopolized friendship” deteriorates class adaptation.

**key words:** exclusiveness, class climate, class adaptation, circulation

### 問 題

本研究では、小学校高学年児童（5・6年生）の仲間集団に対する意識が学級の雰囲気に影響を与え、学級の雰囲気が児童の仲間集団に対する意識に影響を与えるといった循環的な過程の存在を検証し、学級の雰囲気や仲間集団に対する意識が、学級生活に対する適応感に影響する可能性についても併せて検討する。

複数の児童が結び付き、仲間として一緒に行動することが多い児童の集団を、本研究では仲間集団とする。三島(2008)は、小学5・6年生を対象にした調査の結果から、同じ仲間集団に所属している親しい仲間と話をしたり、休み時間を一緒に過ごしたり

するなどして、仲間集団を固定化しようとする指向性を「固定的な集団指向」とし、極めて親しい特定の仲間との親密な関係を背景に、その関係には属さない第三者に対する排他的な考え方や行動傾向の強さを「独占的な親密関係指向」として、これら二つの因子により仲間集団への指向性が構成されることを示した。

小学校高学年児童の特徴として、少人数の仲間と強く結び付き、仲間同士で一緒に行動することを好む傾向があるという指摘(河合, 1985)がなされており、小学校高学年という時期は、「固定的な集団指向」の強い時期と考えられる。Duck(1991)は、この年齢の児童の仲間関係の特徴を、独占的で排他的な関係と指摘しており、小学校高学年という時期

<sup>1)</sup> 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号21530707)の助成を受けた。

\* 中部大学現代教育学部

College of Contemporary Education, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai-shi, Aichi 487-8501, Japan  
e-mail: bau340k@isc.chubu.ac.jp

は、「独占的な親密関係指向」の強まる時期とも考えられる。ベネッセ教育研究所(1998)が小学校5・6年生を対象に行った「友だち関係」に関する調査によれば、小学校高学年の仲間集団は、比較的固定化しており、成員の流動性は低い。

小学校高学年の学級では、「固定的な集団指向」が強まった結果、井上(1992)が指摘しているように、学級内のソシオメトリック構造が小集団に分化することが多い。こうした学級においては、学級集団としてのまとまり以上に、仲間集団としてのまとまりのほうが、学級に所属している児童により強く感じられるようになり、学級として一つにまとまっているという一体感よりも、個々の仲間集団に離散しているという雰囲気をより強く感じるようになることが予想される(Figure 1のパス①)。

離散的な雰囲気が強まった学級においては、同じ仲間集団に所属している児童は相互に活発に交流するが、同じ仲間集団に所属していない児童相互の関係は、相対的により疎遠となり、学級内に存在する仲間集団相互の関係を、学級集団全体としてみた場合には、一つひとつの仲間集団の独立性が強くなり、仲間集団相互の交流が乏しい状況となると考えられる。そのため、離散的な雰囲気が強まった学級で、既存の仲間集団から排除されると、他の仲間集団に入ることが難しく学級内で孤立する可能性が高まることが予想される。学級内で孤立することは、不快なことである(大嶽, 2007)。離散的な雰囲気が強まった学級においては、仲間集団から排除されることを避けようとする傾向が一段と強まり、仲間集団を構成している既存の仲間に対して「独占的な親密関係指向」を強めることが予想される(Figure 1のパス②)。

「独占的な親密関係指向」を強めることは、仲間集団をより固定化させることとなるために、「固定的な集団指向」をさらに強める結果となることが予想され(Figure 1のパス③)、仲間関係に対する指向性と学級の離散的な雰囲気との間に循環的な過程が形成されることが予想される(Figure 1)。

本研究では、「固定的な集団指向」が学級の離散的な雰囲気に影響を与え、離散的な雰囲気が、「独占的な親密関係指向」を強めることにより、「固定的な集団指向」が強まるという循環的な過程の検証を試みる。

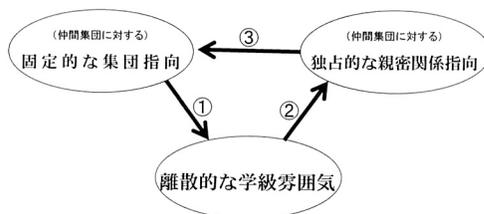


Figure 1 仲間集団に対する指向性と学級雰囲気の間連

ところで、仲間集団に対する「固定的な集団指向」や「独占的な親密関係指向」は、児童の学級生活に対する適応感にどのような影響を与えるのだろうか。

三島(2007)が小学5・6年生約500名を対象に、年度始めと年度末の2回、学級適応感と仲間集団指向性を質問紙法により調査・分析した結果によれば、「独占的な親密関係指向」を強めた女子は、年度末のほうが年度初めに比べて、学級生活に対する適応感を低下させた。こうした結果が得られたことから、「独占的な親密関係指向」は、女子の学級生活に対する適応感に負の影響を与えることが予想される(Figure 2のパス④)。

一方、「固定的な集団指向」の強さは、仲間集団を形成している仲間との関係の固定化を望む強さを示すものである。関係の固定化を強く望むということは、仲間との関係が良好であると予想されることから、「固定的な集団指向」と、仲間関係の良好さの間には、正の関連があることが予想される(Figure 2のパス⑤)。良好な関係にある親しい仲間をもつことは、学校生活に対する適応感を高めることが多くの研究によって支持されている(e.g., Garnefski & Diekstra, 1996; Pope, McHale, & Craighead, 1988)ことから、仲間関係の良好さは学級生活に対する適応感に正の影響を与えることが予想される(Figure 2のパス⑥)。

仲間集団に対する指向性が学級生活に対する適応感に影響することに加え、学級の雰囲気も、仲間関係に関連する適応状況をはじめとした学級生活への適応感に影響を与えることが予想される。

伊藤・松井(2001)は、「他の人と一緒にならないグループがある」、「グループ同士の対立はない(反転)」などの項目により測定された「学級内の不和」の程度と、「学級への満足感」との間に大きな負の

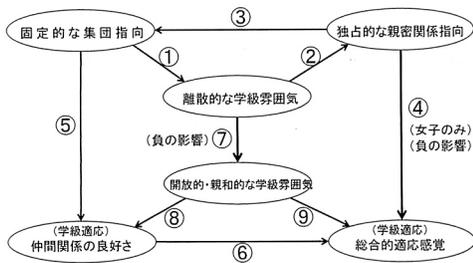


Figure 2 仲間集団指向・学級雰囲気と学級適応感の関連

相関があることを報告している。学級の離散的な雰囲気が強まれば、個々の仲間集団の「独占的な親密関係指向」が強まるだけでなく、学級の開放的・親和的な雰囲気が損なわれることも予想される (Figure 2 のパス⑦)。小野寺・河村 (2002) は、中学生を対象にした調査を行い、「学級全体」に対する自己開示が高い生徒ほど、学校生活満足感が高く、仲間との関係や学級との関係、教師との関係がより良好であるという結果を得た。児童が自己開示しやすい学級とは、だれとでも自由に話ができる雰囲気があり、学級としての一体感がある学級であり、こうした学級のもつ雰囲気を、開放的・親和的な雰囲気とする。開放的・親和的な雰囲気は、児童の自己開示を高める可能性があることから、仲間関係の良好さや学級適応感に正の影響を与えることが予想される (Figure 2 のパス⑧⑨)。

以上のような考えを Figure 2 に示したモデルにまとめた。本研究では、このモデルの妥当性についても検討する。

### 方 法

**対象** A 県 B 市内の小学校 12 校の 5・6 年生 1,402 名 (5 年男子 373 名, 5 年女子 356 名, 6 年男子 339 名, 6 年女子 334 名) を対象に調査を実施し、欠損値がない 1,301 名 (男子 653 名, 女子 648 名) のデータを分析した。

**調査時期** 2009 年 6~12 月

**調査方法** それぞれの学級担任が「朝の会」の時間等を利用して学級単位で調査した。なお、質問紙は B4 サイズ 1 枚 (二つ折り) で、回答に要する時間は、10 分程度である。調査は匿名で実施した。

#### 質問紙の構成

以下の項目について 5 件法で回答する型式の質問

紙を使用した。

**仲間集団指向性** 小学 5・6 年生用に開発された「仲間集団指向性尺度」(三島, 2008) の「固定的な集団指向」に関する 7 項目 (例: 遠足や社会見学は、仲良しの友だちだけで一つのグループをつくりたい。仲良しの友だちだけで、かたまって一緒にいると楽しい)、「独占的な親密関係指向」に関する 8 項目 (例: 自分のいちばん大切な友だちを、ほかの子にとられそうで心配になることがある。新しい友だちをつくる時、今、仲良くしている友だちのことが気になる) の合計 15 項目を用いた。

**学級雰囲気** 伊藤・松井 (2001) が開発した「学級風土質問紙」を参考にした。一つひとつの仲間集団の独立性が強く、仲間集団相互の交流が乏しいという離散的な学級の雰囲気を測定するために、「クラスの中に、ほかの人と一緒にいたがらない『仲良しグループ』がある」「クラスみんなは、『仲良しグループ』に分かれている」の 2 項目を用いた。学級としての一体感があり、だれとでも自由に話ができる開放的・親和的な学級の雰囲気を測定するために、「このクラスは、全員がよくまとまっている」「このクラスで、新しい友だちをつくるのは難しい (反転)」「このクラスには、だれとでも自由に話ができる雰囲気がある」の 3 項目を用いた。

**学級適応感** 小学 5・6 年生用に開発された「階層型学級適応感尺度」(三島, 2006) の「総合的適応感覚」に関する 3 項目 (学校に来るのは楽しい。学校が休みの日は、たいくつだ。学校に行きたくないと思うことがある (反転)), 仲間関係に関連する適応状況をとらえる 5 項目 (例: 困ったことがあったら、友だちに相談する。友だちには、自分の秘密など何でも話すことができる。) の合計 8 項目を用いた。

### 結 果

#### 1. 分析に用いる項目の選定

##### (1) 仲間集団指向性

仲間集団指向性に関連する 15 項目について探索的因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った (Table 1)。固有値の推移 (3.60 → 2.03 → 1.32 → 1.05 → …) および、仲間集団指向性が 2 因子構造であるという先行研究 (三島, 2008) の結果から 2 因子解を採用した。一つの因子に対する負荷量が 0.45

Table 1 仲間集団指向性に関する15項目の因子分析結果

内 容	第1因子	第2因子
g5 自分のいちばん大切な友だちを、ほかの子にとられそうで心配になることがある	.72	-.08
g2 自分のいちばん大切な友だちが、ほかの子と楽しそうに話をしているのを見ると、嫌な気分になる	.63	-.08
g7 仲良しの友だちと交換日記をしたり、手紙のやり取りをしたりしたことがある	.61	-.12
g4 仲良しの友だちと同じ鉛筆や消しゴム、下じきなどをもちたい	.51	.11
g1 新しい友だちをつくる時、今、仲良くしている友だちのことが気になる	.45	-.05
g8 仲良しの友だちと一緒にトイレに行くことがある	.45	.14
h6 遠足や社会見学は、仲良しの友だちだけで一つのグループをつくりたい	-.02	.75
h3 理科の実験などグループで行う学習は、仲良しの友だちだけで一つのグループをつくりたい	.01	.67
h2 仲良しの友だちだけで、かたまって一緒にいると楽しい	-.03	.62
g6 仲良しの友だちと内緒話をしたことがある	.38	.15
g3 朝、学校に来るとき、校門のところで仲良しの友だちと待ち合わせる時がある	.36	.07
h4 学校で、休み時間に話をしたりして遊ぶ相手は決まっている	.19	.41
h7 遊び相手がいつも同じだとつまらない	.13	-.36
h1 仲間と話をするほうが、仲間ではない子と話をするよりも楽しい	.01	.35
h5 自分の気持ちの中で、自分の仲良しの友だちと友だちではない子を分けている	.13	.29
第1因子との因子間相関		.34

※記号は Figure 3~6 の測定変数を示す。

Table 2 学級雰囲気に関する5項目の因子分析結果

内 容	第1因子	第2因子
k4 このクラスには、だれでも自由に話ができる雰囲気がある	.88	.06
k2 このクラスで、新しい友だちをつくるの難しい	-.48	.04
k1 このクラスは、全員がよくまとまっている	.45	-.08
k5 クラスのみんなは、「仲よしグループ」に分かれている	-.04	.60
k3 クラスの中に、ほかの人と一緒にいたがらない「仲よしグループ」がある	-.02	.58
第1因子との因子間相関		-.28

※記号は Figure 3~6 の測定変数を示す。

以上あることを基準に項目の選定を行った。その結果、第1因子に関しては6項目、第2因子に関しては3項目を用いることとなった。この9項目で検証的因子分析を行った結果、適合度を示す値はGFI=.95, AGFI=.91, CFI=.89, RMSEA=.092となった。第1因子に対するパス係数が小さいg8を除外した結果、適合度が改善したことから(GFI=.97, AGFI=.95, CFI=.95, RMSEA=.073)、第1因子に関してはg8を除いた5項目とし、第1因子を「独占的な親密関係指向」因子、第2因子を「固定的な集団指向」因子と解釈した。

## (2) 学級雰囲気

「学級雰囲気」に関する5項目について探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った(Table

2)。第2因子までの固有値が1以上ということで(1.89→1.18→0.78→…), 2因子解を採用した。検証的因子分析を行った結果、良好な適合度を示した(GFI=.99, AGFI=.98, CFI=.98, RMSEA=.047)。第1因子を「開放的・親和的な学級雰囲気」因子、第2因子を「離散的な学級雰囲気」因子と解釈した。

## (3) 学級適応感

「総合的適応感覚」に関する3項目と、仲間関係に関連する適応状況をとらえる5項目の合計8項目について探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った(Table 3)。第2因子までの固有値が1以上ということで(2.97→1.08→0.99→…), 2因子解を採用した。a2の負荷量が0.45に満たなかったことからa2を除いた7項目で検証的因子分

Table 3 学級適応感に関する8項目の因子分析結果

内 容	第1因子	第2因子
b5 友だちのことを大切にしている	.61	-.02
b4 友だちが一緒にいると楽しい	.59	.07
b3 友だちから自分は大切にされている	.57	.05
b2 友だちには、自分の秘密など何でも話すことができる	.53	-.01
b1 困ったことがあったら、友だちに相談する	.48	.01
a1 学校に来るのは楽しい	-.03	.97
a3 学校に行きたくないと思うことがある	-.05	-.57
a2 学校が休みの日は、たいくつだ	.02	.27
第1因子との因子間相関		.59

※記号は Figure 5 と 6 の測定変数を示す。

Table 4 下位尺度得点の男女別平均と S.D.

内 容	男子 n=653		女子 n=648		t 値 (df=1299)	p
	平均値	(S.D.)	平均値	(S.D.)		
総合的適応感覚 尺度得点	3.60	(1.04)	3.57	(1.04)	0.48	
仲間適応 尺度得点	3.49	(0.65)	3.74	(0.63)	6.93	***
固定的な集団指向 尺度得点	3.97	(0.89)	3.91	(0.92)	1.21	
独占的な親密関係指向 尺度得点	2.06	(0.71)	3.16	(0.78)	26.66	***
開放的・親和的な学級雰囲気 尺度得点	3.29	(0.88)	3.28	(0.88)	0.18	
離散的な学級雰囲気 尺度得点	3.18	(0.99)	3.62	(0.90)	8.45	***

\*\*\* $p < .001$

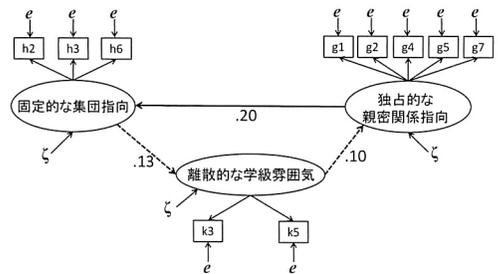
析を行った結果、おおむね良好な適合度を示した (GFI=.97, AGFI=.94, CFI=.94, RMSEA=.080)。第1因子を「仲間適応」因子、第2因子を「総合的適応感覚」因子と解釈した。

2. 下位尺度得点の性差

それぞれの因子の解釈に用いた項目の素点の平均値を算出して下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値等を男女別に求めて比較した (Table 4)。その結果、学級適応感に関連する「仲間適応」尺度得点、仲間集団指向性に関連する「独占的な親密関係指向」尺度得点、および「離散的な学級雰囲気」尺度得点は、男子に比べて女子のほうが有意に大きな値を示した。そこで、以降の分析は男女別に行う。

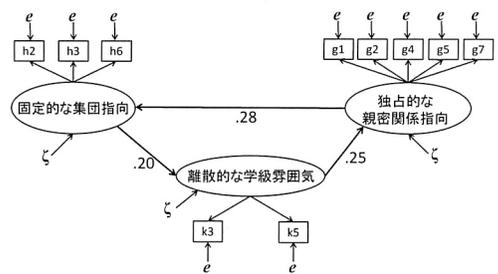
3. Figure 1 に示した循環的な過程の検証

Figure 1 に示した変数の関連をもとにして Figure 3 と 4 のモデルを作成し、共分散構造分析を行った結果、データに対するモデルの当てはまりはおおむね良好でありつた (GFI=.97, AGFI=.94, CFI=.93, RMSEA=.045)。女子のモデル (Figure 4) のパス係数はすべて有意な水準であったが、男子のモデル (Figure 3) の二つのパス係数が有意な水準ではなかった。



(実線は有意なパス ( $p < .01$ ) 破線は有意ではないパス)

Figure 3 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連 (男子)



(実線は有意なパス ( $p < .01$ ))

Figure 4 仲間集団指向性と学級雰囲気の関連 (女子)

以上の結果は、Figure 1 に示した循環的な過程が小学校高学年女子には認められるが、男子には認められないことを示唆するものである。

4. 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感との関連

仲間集団指向性と「離散的な学級雰囲気」との循環的な関連が存在することを示唆する結果が、小学校高学年女子については得られたことから、Figure 2 に示した学級適応感との関連を加えたモデル (Figure 5 と 6) を作成し、共分散構造分析を行った。

その結果、データに対するモデルの当てはまりはおおむね良好だった (GFI=.91, AGFI=.88, CFI=.84, RMSEA=.048)。パス係数を見てみると、男子に関しては、「独占的な親密関係指向」から「総合的適応感覚」へのパスは有意な水準のものではなく、「独占的な親密関係指向」が学級生活に対する適応感に影響を与えていない (Figure 5)。しかし、女子に関しては、すべてのパスが有意な水準のものであり、「独占的な親密指向」が「総合的適応感覚」に、有

意な負の影響を与えることが示唆された (Figure 6)。

考 察

1. 仲間集団指向性と学級雰囲気の循環的な関連

「固定的な集団指向」を児童が強めることにより、学級の離散的な雰囲気が強まり、「離散的な学級雰囲気」の強化が、「独占的な親密関係指向」を強め、「独占的な親密関係指向」の強化が、「固定的な集団指向」を強めるという循環的な過程の存在を示唆する結果が女子に関してのみ見られた。

小学校高学年男女を対象とした研究によれば、男子の仲間集団を学級という視点から見た場合、相互に影響し合う集団構造を示す場合が多いのに対し、女子の仲間集団は、細分化・分断化する傾向を示す場合が多い (狩野・田崎, 1990)。さらに、小学校高学年に相当する年齢の子どもたちの仲間遊びに関する研究 (Goodwin, 2006) によれば、仲間集団外の子どもを排除することにより、仲間集団の成員であるかどうかの境界 (boundary) を示す方略を、男子に比べて女子のほうがよく用いた。こうしたことから、「仲良しの友だちだけで、かたまって一緒にいると楽しい」などという「固定的な集団指向」が強くても、男子の場合には、仲間集団が相互にかかわり合い、さらに、集団外の成員を積極的に排除する傾向が女子に比べて弱いため、「固定的な集団指向」を強めることが「離散的な学級雰囲気」を強めることに結び付かなかったのではないだろうか。

一方、女子の場合には、「固定的な集団指向」を強め、仲間集団内における成員相互のかかわり合いを強めた結果、集団外の児童とかかわり合う時間や機会が減少し、集団外の児童とのかかわり合いを相対的に弱めた可能性がある。仲間集団外の児童とのかかわり合いが弱まった結果、他の仲間集団内の成員が、相互にどのようなかかわり合いを現実に行っているのかといった実態の把握が十分になされず、他の仲間集団の成員も、自分たちの仲間集団の成員同様、「固定的な集団指向」を強くもっていると推測することから、「固定的な集団指向」が強い女子ほど、「離散的な学級雰囲気」を強く認識した可能性がある。

「離散的な学級雰囲気」を強く認識している女子ほど、「独占的な親密関係指向」が強いという関係 (パス②) が見られた背景については、こうした児童が「離散的な学級雰囲気」を強く認識した結果、

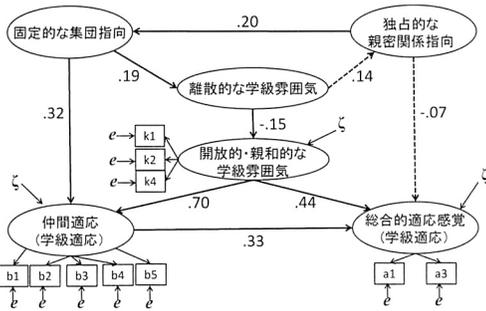


Figure3のモデルにある潜在変数の測定変数等の表記は省略 (実線は有意なパス (p<.05) 破線は有意ではないパス)

Figure 5 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連 (男子)

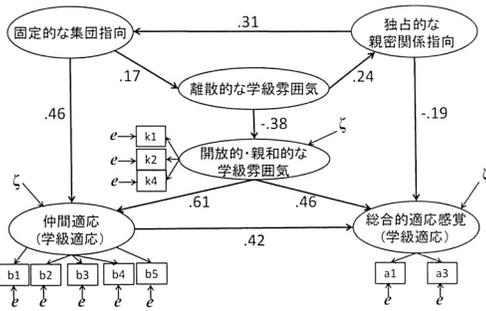


Figure4のモデルにある潜在変数の測定変数等の表記は省略 (実線は有意なパス (p<.01) 破線は有意ではないパス)

Figure 6 仲間集団指向性・学級雰囲気と学級適応感の関連 (女子)

既存の仲間集団から排除されると、他の仲間集団に入るのが難しいために学級内で孤立する可能性が高いという不安を覚え、この不安が、「自分のいちばん大切な友だちを、ほかの子にとられそうで心配になることがある」などといった「独占的な親密関係指向」を強める結果となったのではないだろうか。

「独占的な親密関係指向」が強い女子は、「自分のいちばん大切な友だちを、ほかの子にとられそうで心配になる」などといった気持ちをより強くもっていることから、こうした不安を解消するために、仲間との関係をより強化し、「遠足や社会見学は、仲良しの友だちだけで一つのグループをつくりたい」などといった「固定的な集団指向」に含まれる行動に対する指向性を強めた可能性もある。

## 2. 仲間集団指向性・学級雰囲気学級適応感に与える影響

仲間集団に対する指向性や学級雰囲気が学級生活に対する適応感に影響を与えるという仮定をもとにしてモデル (Figure 2) を作成し、適合度を検証した結果、データに対するモデルの当てはまりは、おおむね良好だった。

そこで、仲間集団に対する指向性や学級雰囲気が、学級適応感に影響を与えた背景について考察する。

「仲間適応」に関しては、「固定的な集団指向」と「開放的・親和的な学級雰囲気」の二つがそれぞれ影響を与えることが示唆された (パス⑤⑧)。

いくつかの研究で、仲間との親密な関係と学級集団からの受容は、児童にとって独立した効果を及ぼすことが指摘されている (e.g., Bukowski & Hoza, 1989; Oden & Asher, 1977)。

同じ仲間集団に所属する親しい仲間との固定的な関係を強化し仲間集団内における成員相互の親密さを増すことと、学級全体の開放的・親和的な雰囲気の高まりが学級の受容的な雰囲気を高めることが、それぞれ独立して「仲間適応」に影響を与えた可能性がある。

黒川 (2006) は、小学校高学年児童を対象に、仲間との関係に関する調査を行った結果、同じ仲間集団に所属しない児童との交友関係が「級友適応 (学級内の仲間との良好な関係)」にポジティブな影響を与えることを示唆する結果を得た。「開放的・親和的な学級雰囲気」が強い学級においては、同じ仲間

集団に所属しない児童相互の交流も活発に行われやすいことから、「開放的・親和的な学級雰囲気」が、同じ仲間集団に所属しない児童との良好な関係づくりにポジティブな影響を与え、その結果、「仲間適応」にもポジティブな影響を与えた可能性もある。

「開放的・親和的な学級雰囲気」は、「仲間適応」を高めることを通して、学級生活全般に対する適応感である「総合的適応感覚」を間接的に高めるだけでなく、直接、「総合的適応感覚」に影響を与える可能性があることも示唆された (パス⑨)。

「開放的・親和的な学級雰囲気」が、「総合的適応感覚」に直接影響を及ぼすプロセスについて考察する。

「開放的・親和的な学級雰囲気」を強く感じている児童にとって学級は、自由に話ができる場であり、友だちづくりも円滑に進めることができる環境である。そのため、「開放的・親和的な学級雰囲気」を感じていない児童に比べて、学級内で排斥される経験自体が少ないことが予想できる。他者から排斥されることは不快な体験である (e.g., Williams, Cheung, & Choi, 2000; Zadro, Williams, & Richardson, 2004)。排斥される経験が少ないということは、こうした不快な体験をする機会も少ない。そのため、「開放的・親和的な学級雰囲気」を強く感じている児童は、排斥されることに伴って生じる不快な体験をすることが少ないために、「総合的適応感覚」が高かった可能性もある。

Eisenberger, Taylor, Gable, Hilmert, & Lieberman (2007) は、周りの人から排斥されることに伴って生じる心理的・生理的な不快感などを、磁気共鳴断層画像法 (MRI) を利用して測定する実験を行い、周りの人々から多くのサポートを日常的に受けている人は、排斥に伴って生じる不快感等が小さいという結果を得た。「開放的・親和的な学級雰囲気」を強く感じている児童は、学級内の多くの児童とかわり合うことができる児童であることから、情緒的・社会的なサポートを周りの児童から提供される可能性も高い。そのため、こうした児童が仮に排斥されることがあったとしても、排斥した児童以外の児童から多くのサポートを受け、経験する不快感が小さくて済むために、学級生活に対する適応感覚が高いレベルで維持されたのではないだろうか。

小学校高学年女子を対象とした調査 (三島,

2007)で、「独占的な親密関係指向」の強化が、学級適応感を低下させるという結果が得られている。本研究においても、「独占的な親密関係指向」から「総合的適応感覚」へのパス係数は女子に関してのみ、有意な水準であり、「独占的な親密関係指向」を強めた女子は、「総合的適応感覚」を低下させることが示唆された。

こうした関連が男子に見られなかった理由として、「独占的な親密関係指向」の強さに大きな性差があったことが考えられる。「独占的な親密関係指向」尺度得点を見てみると (Table 4), 男女間の得点差が他の尺度得点に比べて大きく (「独占的な親密関係指向」尺度得点の  $t$  値 = 26.66 であるのに対して、他の尺度得点の  $t$  値は、同じ自由度で 8.5 以下である)、男子の場合には、「総合的適応感覚」に影響を及ぼすほど、「独占的な親密関係指向」が全般的に強くなかったために、両者の間に有意な関連が見られなかった可能性もある。

「独占的な親密関係指向」と「総合的適応感覚」の間に女子にのみ負の関連が見られた背景について、今後は、時系列的な資料を収集するなどして、さらに検討する必要がある。また、本研究では、仲間との関係に関する質問に、「友だち」という表記を用いており、「仲間」と「友だち」の違いについては考慮していない。今後は、両者の違いにも配慮し、質問紙の表記と測定したい内容との整合性をより高めた調査を実施し、本研究の妥当性や課題についても検証する必要がある。

## 文 献

- ベネッセ教育研究所 1998 モノグラフ・小学生ナウ (友だち関係), 18-2, ベネッセコーポレーション.
- Bukowski, W. M. & Hoza, B. 1989 Popularity and friendship: Issues in theory, measurement, and outcome. In Berndt, T. J., & Ladd, G. W. (Eds.), *Peer relationships in child development*. pp. 15-45. New York: Wiley.
- Duck, S. 1991 *Friends, for life: The psychology of personal relationships*. Harvester Wheatsheaf. (ダック S. 仁平義明(監訳) 1995 フレンドーズスキル社会の人間関係学— 福村出版)
- Eisenberger, N. I., Taylor, S. E., Gable, S. L., Hilmert, C. J., & Lieberman, M. D. 2007 Neural pathways link social support to attenuated neuroendocrine stress responses. *NeuroImage*, 35, 1601-1612.
- Garnefski, N., & Diekstra, R. F. W. 1996 Perceived social support from family, school, and peers: Relationship with emotional and behavioral problems among adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 35, 1657-1664.
- Goodwin, M. H. 2006 *The hidden life of girls: Games of stance, status, and exclusion*. Blackwell Publishing.
- 井上健治 1992 人との関係の拡がり 木下芳子(編) 対人関係と社会性の発達 (新・児童心理学講座 8) 金子書房 pp. 3-28.
- 伊藤垂矢子・松井 仁 2001 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, 49, 449-457.
- 狩野素朗・田崎敏昭 1990 学級集団理解の社会心理学 ナカニシヤ出版.
- 河合芳文 1985 ソシオメトリ入門 みずうみ書房.
- 黒川雅幸 2006 仲間集団外成員とのかかわりが級友適応へ及ぼす影響 カウンセリング研究, 39, 192-201.
- 三島浩路 2006 階層型学級適応感尺度の作成—小学校高学年用— カウンセリング研究, 39, 81-90.
- 三島浩路 2007 小学校高学年児童の友人関係における排他性・親密性と学級適応感との関連 東海心理学研究, 3, 1-10.
- 三島浩路 2008 仲間集団指向性尺度の作成—小学校高学年用— カウンセリング研究, 41, 129-135.
- Oden, S., & Asher, S. R. 1977 Coaching children in social skills for friendship making. *Child Development*, 48, 495-506.
- 小野寺正己・河村茂雄 2002 中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究, 35, 47-56.
- 大嶽さと子 2007 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響: 面接データに基づく女子グループの事例的考察 カウンセリング研究, 40, 267-277.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. Pergamon Press. (ポーブ A. W.・ミッキヘイル S. M.・クレイグヘット W. E. 高山 巖(監訳) 1992 自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる— 岩崎学術出版社)
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. 2000 Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748-762.
- Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. 2004 How low can you go? Ostracism by a computer lowers belonging, control, self-esteem, and meaningful existence. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 560-567.

(受稿: 2010.11.26; 受理: 2012.9.2)